

実習報告（異校種実習）

「逆向き設計」の理論に基づいた学びの実践的研究 —課題解決能力の育成を目指す自己評価活動を取り入れた家庭科学習デザイナー—

江口 佐智子（授業実践探究コース：現職教員）

【探究実習のテーマと設定の理由】

本実習においては、課題解決能力を育むための自己評価活動を取り入れた家庭科の授業のあり方について探究する。その視点として、G. ウィギンズとマクタイ（2012）の「逆向き設計」の理論「理解の6側面」に依拠した自己評価活動を取り入れ、生徒の学びの状況を考察した。

平成29年告示小学校学習指導要領家庭編では、具体的に問題解決の学習過程例を示し、問題解決的な学習における課題解決能力の育成を一層重視している。一方、佐賀県の小学校教員の調査では、問題解決的な学習を取り入れていない教員が4割前後見られ、調理や製作の授業では作品を完成させることが目的になっている実態が見られる（岡ら、2020）。また、子ども自身が「問題」を感知し、つかみ、取り組むといった、子どもの興味関心から出発する問題解決学習にはなっていないこと（荒井、2009）も指摘されている。そこで、課題解決能力の育成にあたって重要視される問題解決的な学習に注目する。

G. ウィギンズとマクタイ（2012）の「逆向き設計」の理論では、理解を直接目で見るができないうし、学習内容が転移する場面を「理解の6側面」として注目する。洗練された理解がもたらされているか6つの側面から検討するとする。この「理解の6側面」の「パースペクティブを持つ」「自己認識を持つ」を意識した自己評価活動を問題解決的な学習過程に意図的に取り入れ、生徒が何気なく過ごしてきた日常生活の中に様々な問題が隠れていることに気付いたり、批判的・複眼的な見方で生活を捉えたりすることを目指す。このことが「課題解決能力」を育成することにつながると考えた。

【探究実習の研究目標】

(1) 小中連携の視点からの授業づくりの検討

課題設定過程での中学生の実態をもとに、課題設定過程の生徒が問題を捉えるための学習のあり方を把握・検討し、小学校の家庭科教育とのつながりを意識した授業について考察する。

(2) 課題解決能力の育成を目指す授業づくりと自己評価の検討

逆向き設計による授業設計を通して、問題解決的な学習過程における自己評価活動の位置づけやそのあり方について考察し、課題解決能力を育成する自己評価活動を検討する。

【探究実習の概要】

平成24年度より小中連携に取り組んでいるA中学校では、小中で育む資質・能力を明らかにし、題材を通して構成された小中で一貫した指導計画に基づき、問題解決的な学習過程を重視している。そこでは、小学校家庭科と中学校家庭分野での学びがつながり、段階的で、反復的な学習活動や指導が行われている。本実習においては、A中学校第2学年において、学習指導要領「B 衣食住の生活」の食生活の内容について題材を構成し、授業実践を行った。A中学校の小中で一貫した学習過程に基づき「題材を貫く問い」の設定を行い、生徒一人ひとりの生活の問題から発生する「個別の問い(課題)」を設定する学習活動を行った。

また、学習過程における生活の課題発見過程と実践活動の評価・改善過程に注目し、「逆向き設計」の理論「理解の6側面」の「パースペクティブを持つ」「自己認識を持つ」を意識した自己評価活動を

取り入れた。そこでは、食生活の現状の自覚、食生活の問題点の把握、他者との交流からの気づきの生成をねらった学習活動を設定し、思考の流れを可視化するために、ワークシートやポートフォリオを工夫した。授業分析では、「パースペクティブを持つ」と「自己認識を持つ」を援用し、ワークシート等の記述を通して生徒の学び（食生活における課題の把握と解決）の状況の質的分析を行った。

その結果、生徒の理解については、次の3つの状況があることが分かった。

- ・ 批判的、複眼的な見方を持ち、日常の食習慣を自己の課題として知覚している（12人）
- ・ 批判的、複眼的な見方を持ち始め、日常の食習慣を自己の課題として知覚しつつある（14人）
- ・ 批判的、複眼的な見方を持たず、日常の食習慣を自己の課題として知覚しきれていない（9人）
- ・ その他（1人）

自分の食生活を振り返り、問題点から解決したい課題を焦点化し、他者との交流からの気づきを活かして問い(課題)を作成した生徒は、自分の食生活を批判的に捉え、食生活を新たな視点を持って見る複眼的な見方をすることができた。個別の問いを解決していく意識を持って学習に臨み、食生活全体に活かす思いが抽象化されて語られた。一方で、無自覚だった生活の問題を認識したり、交流での気づきを活かしたりして問いを設定できたが、解決時には交流の気づきを活かせなかった生徒や、個別の問いの解決ができていても具体的に生活に活かそうとすることができなかった生徒がいた。交流することによって他者の考えに引っ張られ、自分の問いの解決がなされなかった事例もあった。

これらのことから、課題発見過程では、問題を捉えるために改めて生活を振り返り、問題を自覚すること、他者との交流によって批判的・複眼的な見方を持つことを生徒に促せたが、生徒は学習の終末までそれらを持ち続けることが難しかったことなどが今後の課題として確認できた。

【探究実習の成果と課題】

探究実習を通しての成果と課題は、次の2点である。

1 つ目は、小中で育む資質・能力を明確化して小中で一貫した学習過程に基づき問題解決的な学習を積み上げることは、児童生徒が問題解決方略をスモールステップで身につけることができ、円滑な小中連携に有効であることが実感できたことである。しかし、課題設定過程の問題を捉えるための方略については、さらなる探究が必要である。学習者自身の問題から発生する「個別の問い(課題)」を設定する学習活動のあり方について考察していきたい。

2 つ目は、生徒が課題発見過程で問題を捉えるためには、改めて自分の生活を振り返り、問題を自覚し、他者との交流によって批判的・複眼的な見方を持つことが重要であることが確認できたことである。しかし、解決のためには、題材を通して「パースペクティブを持つ」「自己認識を持つ」ことができる手立て、学習の終末で個別の課題解決がより具体的に生活の展望へとつながる手立てが必要である。パースペクティブと自己認識の発達を目指す学習が重要なのではないか。

次年度は、1年次探究実習の成果と課題を踏まえ「パースペクティブを持つ」「自己認識を持つ」を意識した自己評価活動の更なる具体化を検討したい。

【引用・参考文献】

- G.ウィギンズ/マクタイ、2012、『理解をもたらすカリキュラム設計―「逆向き設計」の理論と方法』（訳・西岡加名恵）日本標準。
- 荒井紀子、2009、「批判的リテラシーを育む学びをどうつくるか―問題解決学習再考―」荒井紀子/鈴木真由子/綿引伴子編著、『新しい問題解決学習 Plan Do See から批判的リテラシーの学びへ』教育図書：p.38。
- 岡陽子/萱島知子/鈴木明子、2020、「課題解決能力を育む家庭科の指導の現状と課題―佐賀県と広島市の小学校家庭科担当教員の指導状況の分析から―」佐賀大学大学院学校教育学研究科『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第4巻：pp.18-29。